

青山フィルハーモニー管弦楽団

第 39 回外苑祭コンサートプログラムパンフレット別冊

発行日：2008 年 9 月 6 日

編集・発行：青山フィルハーモニー管弦楽団

プログラム

曲目

ドヴォルザーク / スラヴ舞曲集第 1 集より第 1 番
サン＝サーンス / 歌劇『サムソンとデリラ』より「バッカナール」
ブラームス / 大学祝典序曲

日時：2008 年 9 月 6 日（土）、7 日（日）

開場時間：11 時、受付開始時間：11 時 30 分

開演時間：12 時 30 分

会場：東京都立青山高等学校体育館

指揮者

岡村繁（ドヴォルザーク）、白土昴（サン＝サーンス）、渡辺恭祐（ブラームス）

コンサートのききどころ

第 39 回外苑祭コンサートでは、例年以上に趣向の凝らされた選曲がなされています。

一曲目は、ドヴォルザークの「スラヴ舞曲集」第 1 集より第 1 番です。

この曲はボヘミア地方の舞曲フリアントに基づいて書かれた活気で陽気さに満ちた作品です。楽譜上は 3 拍子となっていますが、実際には、「2 拍 + 2 拍 + 2 拍 + 3 拍 + 3 拍」というリズムで構成されているのが大きな特徴といえるでしょう。外苑祭コンサートとしては 2001 年度以来 7 年ぶりのスラヴ舞曲第 1 番をお楽しみください。

続いて演奏されるのは、サン＝サーンスの歌劇『サムソンとデリラ』より「バッカナール」です。

旧約聖書の「士師記」に基づいて作られた『サムソンとデリラ』の舞台は、紀元前のパレスチナのガザです。勇士サムソンは、ペリシテ人に反乱を起こしたヘブライ人を先導し

ますが、ペリシテ人の美女デリラの誘惑に負け、自らの力の根源である髪を切られ、目をつぶされてしまいます。しかし、最後の奇跡を祈って力を取り戻したサムソンは、自らの命を投げ出してペリシテ人の神ダゴンの神殿を壊し、多くのペリシテ人を道連れにして最期を迎えるのでした。

オーボエのカデンツァから始まるバッカナールは、第三幕に登場する、ヘブライ色に満ちたとも異国情緒に富んだともいえる作品です。

目をつぶされダゴンの神殿で石臼を挽くサムソンの前に現れるデリラの妖艶さと、酒神バックスを称える祭儀であるバッカナールが繰り広げられる様子を描いたこの曲を青フィルがどのように演奏するか、注目です。

最後に取り上げるのは、外苑祭コンサートでは3年ぶりの登場となる、2008年度の青フィルの年間曲でもあるブラームスの大学祝典序曲です。

この作品は、1879年にドイツ帝国領ブレスラウにあったブレスラウ大学から名誉博士号を授与されたブラームスが、その返礼として1880年に作曲されました。

大学祝典序曲は1881年1月にブラームス自身の指揮によってブレスラウ大学で初演され、好評を博しました。ソナタ形式を採用し、厳密な構成によって作られたこの作品が人々に受け入れられた背景のひとつには、当時広く普及していた学生歌を巧みに取り入れたブラームスの機知を挙げることができるでしょう。

ちなみに、ブラームスが大学祝典序曲で採用した学生歌は、次の四つとなります。

「我らは立派な校舎を建てた」(原題: *Wir hatten gebauet ein stattliches Haus*)

「国の親父」(原題: *Landesvater*)

「新入生の歌」(原題: *Was kommt dort von der Höhe?*)

「だから愉快にやろうじゃないか」(原題: *Gaudeamus igitur*)

一連の交響曲や「ドイツ・レクイエム」といった「難解」「晦渋」と思われがちな作品を残したブラームスには珍しいとさえ見える軽妙洒脱な音楽ですが、大家の余技という域にとどまらない緻密な構成と印象的な旋律の数々は、ブラームスの代表的な管弦楽曲といえるでしょう。

快活な旋律、なまめかしい響き、そして陽気な音楽と、それぞれ持ち味の違う三つの曲をどのように皆様にお伝えするか。青フィルの演奏にご期待下さい。

女性指揮者の 10 シーズン

1970年から活動を続ける青フィルに初めて女性の指揮者が誕生したのが1998年9月のことでした。以来、女性指揮者の存在は今年で満10シーズン目を迎え、青フィルの中に完全に定着しました。

そこで、今回は女性指揮者誕生から現在までの歩みを振り返ります。

女性指揮者誕生の伏線となった女性部長の存在

現在では女性の指揮者も女性の部長も当たり前の光景ですが、青フィルの歴史の中で、女性が指揮者や部長に就任することは長らくありませんでした。「女性がなれるのは副部長かコンサートミストレスまで。部長や指揮者は男性が担当する」というのが、暗黙の了解事項として前提されていたのです。

そうした状況に変化が訪れたのは、1997年度のことでした。トロンボーンパートの岩上さやかさんが部長となり、初の女性部長が誕生したのです。長らく男性が占めていた部長職に女性が就任したことで、役職間の男女のすみわけはなくなり、事実上、女性指揮者誕生への道も開かれたのでした。

当時の青フィルにとってこうした展開は日常の活動の一環であったといえるでしょう。しかし、歴史的に振り返ってみると、女性部長の存在が、女性指揮者誕生の伏線となった、といえるのです。

女性指揮者の誕生

こうして迎えた1998年9月、当時の1年生を対象とした1999年度の係決めが行われました。合宿係、楽譜係などが決まる中で、指揮者にトロンボーンパートの高倉彩さんが選ばれ、ついに青フィル初の女性指揮者が誕生したのです。このときは、高倉さんの他に齋藤祐仁さんと田崎孝典さんも指揮者に選ばれ、1999年度は青フィル史上初めてとなる「指揮者が3人」という体制で臨むこととなりました。

高倉さんは3人の指揮者の筆頭として、チャイコフスキーの交響曲第5番や、年間曲であったワーグナーの楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』第1幕への前奏曲を指揮し、定期演奏会、外苑祭コンサート、全国高等学校選抜オーケストラフェスタなどの演奏会を成功に導きました。

女性指揮者の系譜

高倉さんの活躍もあり、2000年度以降も毎年女性の指揮者が誕生し、青フィルにとって「女性の指揮者」は日常の風景のひとつとなりました。

以後、今日に至るまで女性の指揮者が途絶えることはなく10代にわたってその系譜は続き、青フィルの歴史に大きな足跡を残す、輝かしい活躍の数々を披露してきました。

そのような青フィルの女性指揮者の顔ぶれは次の通りとなります。(表1)

1999 年度	高倉彩	齋藤祐仁	田崎孝典
2000 年度	堀越まき	村尾雄太	
2001 年度	大部恵美	山口大悟郎	
2002 年度	小原道子	吉田拓人	
2003 年度	森詩織	山下隆志	
2004 年度	中川愛子	中村静帆	
2005 年度	見城志乃生	高橋彩	
2006 年度	中澤弘子	西村新	
2007 年度	齊藤美海	堀仁美	
2008 年度	白土昴	渡邊恭祐	

太字：女性

細字：男性

：定期演奏会の大曲の指揮者

：年間曲の指揮者

以上、敬称略

表 1 1999 年度から 2008 年度までの指揮者の顔ぶれ

この 10 代で指揮者は延べ 21 人で、このうち、男性が 8 人、女性が 13 人です。また、男女がともに指揮者を務めたのは 7 回、女性だけの代が 3 回で、男性だけの代は皆無となっています。

全国の他の高校や大学のオーケストラでは女性の指揮者や学生指揮者の割合が少なく、専門家に至っては絶対数そのものが希少だという現状を考えると、青フィルにおける女性指揮者の数は相対的に多いものだといえるでしょう。同時に、男性に比べて女性の部員数が多い青フィルの実態に沿った内容となっているといえるかもしれません。

「初の女性指揮者」の思い出

最後に、今日まで続く青フィルの女性指揮者のさきがけとなった高倉さんが寄稿された、当時の思い出をご紹介します。

青フィルを 2001 年に卒業した高倉彩と申します。

私は初の女性指揮者、だったようなのですが、当時の私はそんなことは全く知らず、ただ「なんだか楽しそうだ！」ということだけで指揮者に立候補してしまい、後々大変な思いをすることになりました。

しかし、それは純粹に指揮者として大変だったのであって、「女性だから」といって特別扱いをされることもなく、大変ながらもとても充実した日々であったと思います。